

京都フランス音楽アカデミー — 創設（1990年）から2002年まで —

田 隅 靖 子

1. 京都フランス音楽アカデミーの誕生

今も、あの夜の一瞬の静けさが甦る。聴衆は大きな期待のうちに「第1回京都フランス音楽アカデミー アンサンブル・スペシャル・コンサート」の開演を待っていた。1990年3月31日夜7時、京都府立府民ホール<アルティ>。

この夜演奏されたモーツァルト、ストラヴィンスキー、ラヴェル、サン＝サーンスの作品において示されたパリ国立高等音楽院教授達を中心とする11名の演奏は、京都の音楽愛好家・音楽学生などによる満員の聴衆を熱狂と感嘆へと導いた。その自然で、しかも奥行のある音楽の姿は、才能に恵まれて生まれた音楽家が、さらに最高の教育を受けて到達した境地を示していた。

上記のコンサートは、「第1回京都フランス音楽アカデミー」の学生へのレッスン期間内に行われた。この企画はあまりにも規模が大きく、また良質であり、第1回へこぎ着けるまでの関係者の努力は外部の人間の想像をはるかに超えるものだったことであろう。

ことの始まりは、1988年の晩春、当時の関西日仏学館館長ミッシェル・ワッセルマン氏のところへの、ヴァイオリニスト森悠子さん（当時、リヨン国立音楽院助教授）の訪問であった。

長年フランスで暮らしている森さんは、フランスの代表的な教授達を京都へ招き、日本の音楽学生達が彼らから演奏法を学ぶ講習会を関西日仏学館を中心として開催したい、とワッセルマン氏に告げたのだった。

ワッセルマン氏は驚いたが賛成、しかし「開催までには長い年月が必要」と考えていた。行動力のある森さんはすぐに、パリで各教授達に主旨を話し、承諾を得る。その直後京都では、第3回「日仏文化サミット」が開催され、国と私企業との参加による文化擁護をテーマに話し合いが行われていた。幸いにもこの席で、「京都フランス音楽アカデミー」の計画が浮上、早

くも 1990 年春に開催の運びとなったのだった。

初回の教授陣 10 名の顔ぶれは次のとおりである。J-C. ペスティエ (ピアノ), Ch-エダ・ピエール (声楽), P. ドゥカン, R. ドガレイユ (ヴァイオリン), B. パスキエ (ヴィオラ), A. ムニエ (チェロ), R. ギヨー (フルート), P. ピエルロ (オーボエ), M. アリニョン (クラリネット), P. ティボー (トランペット)。

このアカデミーは、教育活動と、日本主要 5 都市での可変 (3 重奏～7 重奏) 構成プログラムによる室内楽コンサートを軸とする。

教育活動は 1 日 6 時間、12 日間の授業で、クラス全員を前にしての個人レッスン。さらに、各クラスとも期間中に 1 回の公開レッスンを行い、音楽関係者、一般市民に公開する。初回のアカデミーへの参加希望学生は定員の 3 倍以上となり、厳しいテープ審査で参加者を選んだ。

第 1 回終了後、チェロのムニエ教授は「日本の音楽学生は、技法を学ぶだけでなく、表現したいという情熱が感じられる。ただもっと遊びがあってもいい」と述べ、いっぽう学生からは「講義では表現をもっと外へ出す工夫を習い、勉強になった」との反省があった。

主催者側として、ワッセルマン氏は「日仏関係はいろいろ難しい状況にあるが、このアカデミーは、フランスが文化の分野ではまだ確固たるものをもっていることを示すものであり、だからこそ日本の主要な経済界グループと新聞社がフランス国外では初めての試みである今回の芸術的な催しに協力してくれたのだ、と思う」と述べた。また森さんは、「言葉で言い表せない充実感でいっぱい。でも成功とは言いたくない。このアカデミーはこれでおしまいではないから…」と翌春への意欲を示していた。

ミッシェル・ワッセルマン氏が関西日仏学館館長として在籍したのは、1986 年～1994 年春だった。本エッセイでは、この間のワッセルマン氏の大きな仕事となった「フランス音楽アカデミー」と、それに関連する音楽学生への教育活動の記録を取りあげるが、1990 年～2002 年の各アカデミー・アンサンブル・スペシャル・コンサートの演奏プログラム内容があまりに多彩かつ興味深いため、その主要部分をそのまま掲載することとした。

2. 第 1 回 (1990 年)

初回のプログラムには、駐日フランス大使ベルナール・ドラン氏、朝日新聞社社長・中江利忠氏、パリ国立高等音楽院名誉教授・アンリエット・ピュイグ＝ロジェ女史、関西日仏学院館長・ミッシェル・ワッセルマン氏のお祝いの言葉が記載されている。

その中で、京都フランス音楽アカデミー名誉校長のアンリエット・ピュイグ＝ロジェ女史のメッセージをここにそのまま載せる。

「素晴らしきプログラム！

第一級にして多彩な作品構成（私は愛国主義者をもって任じておりますから、非常にフランス的なプログラムであると申すことにいたしましょう…）。

幼い頃、マリー・アントワネットのチェンバロを弾いて遊び、おそらくはヴェルサイユの庭の木立のあいだを走り回って遊んだりしたであろう、音楽の天使モーツァルトの作品で始まるこのプログラムは、次にストラヴィンスキーへと続きます。このパリジャンのロシア人は、最初に喝采を浴びたフランスで数多の傑作を生んだのち、アメリカへと飛び去りました。スイスの作家ラミュの詩に基づく『兵士の物語』は、3楽器の編成ながら、元の曲のダイナミズムを余すところなく表しています。

『マダガスカル島民の歌』は、私たちをエキゾチックな世界へと誘いこんでくれます。『シェーラザード』の場合と同じように、非常に限られた手法を用いながら、ラヴェルの想像力と喚起力は極めて強力です。惹きこまれずにはられません。

ぐっとクラシックな感じでこのプログラムを締めくくるサン＝サーンスの有名な七重奏曲は、それぞれのパートの持ち味、特にトランペットの味をたっぷりと楽しめるという大きな魅力を持っています。

さて、選り抜きの優れた作品を讀めたあとは、選り抜きの特別に優れた演奏者達を讀るべきでしょう。これだけの花形を一堂に集めるとはまさに天晴です！」

<日付と会場>

- 3月31日（土）京都府立府民ホール<アルティ>
- 4月4日（水）カザルスホール
- 4月5日（木）富山県民会館大ホール
- 4月6日（金）呉市文化ホール
- 4月8日（日）ザ・シンフォニーホール

<プログラム>

- モーツァルト：オーボエ四重奏曲 へ長調 K.370
- ストラヴィンスキー：「兵士の物語」ヴァイオリン、クラリネット、ピアノのための組曲
- ラヴェル：「マダガスカル島民の歌」（全3曲）
- サン＝サーンス：七重奏曲 変ホ長調 作品65

<演奏者>

- p.196 に既述の10名、奥田一夫（コントラバス）

1990年10月、ロン・ティボー国際コンクール・ヴァイオリン部門で第1位を小林美恵（24歳）が得た。このコンクールでの日本人の優勝は初めてである。小林美恵さんは、第1回京都フランス音楽アカデミーの受講者であり、Les Voix（京都日仏学館季刊誌）秋号にワッセルマン館長との対談が載っているので一部転載する。

「1990年のアカデミーの前に、ヴァイオリンのロラン・ドガレイユ氏と沖縄で協演し、ピエール・ドゥカン先生が来洛されることを知り、申し込みました。自分一人で楽譜からだけでは吸収できなかったドビュッシーの思想、音の出し方、音色など、音楽の裏にある内面の豊かさをドゥカン先生から教えていただきました。すでにサン＝サーンス、ドビュッシー、フランクなどフランスの音楽はよく弾いていましたが、ドゥカン先生によって全く新しいインスピレーションを得た、という気がします。そのおかげで自然にコンクールに臨めた、と思います。」

第1回アカデミー受講者で、平成5年（1993年）からパリ国立高等音楽院第3課程で学び、1995年ラフマニノフ国際ピアノコンクール2位、1996年リスト国際ピアノコンクール2位の奈良田朋子さんは、次のような感謝の一文を寄せている。

「私が大学1年の秋ごろだったと思います、のんびりとマイペースな音楽人生を送っていた私に、『今度の春に京都で初めてフランス人の教授ばかりの講習会が開催されるが、参加しないか』との声がかかりました。

運よく書類審査に合格し、J-C. ペヌティエ氏のクラスに入れていただくことになりましたが、もうひとつのクラスは来日予定だったP. バルビゼ氏の急逝に伴い閉講となってしまい、自分の運の強さを感じたものです。

そこで受けたレッスンというのは、それまでの自分を根本から覆すほどの衝撃の連続でした。音が歌うとはどういうことなのか、強い意志のもと、身体から全身全霊で音を紡ぎ出していくその歌心や、引き出しの奥からどんどん出てくる音色のパレットの豊かさ、フランス人ならではの洒落たセンスや素敵な脱力感、等々。

一気に“フランス人の奏でる音楽”に恋に落ちました。もともと音楽高校出身でもなく、それほど強い意志を持って音楽を続けてきたわけでない私は、ここで初めてカルチャーショックに陥り、そして自分の目指す音楽が、フランス人的感覚を理想とすることにも気づいたのです。

また同じクラスの9割近くは東京勢であり、そのレヴェルの高さにもショックを受けてやっと目の覚めた私はそれ以後、コンクールへの挑戦やフランス現地での講習会への参加

京都フランス音楽アカデミー（田隅）

等、遅まきながら音楽にのめりこんでいって猛烈に練習をするようにもなり、また狭い大学内や国内ではなく、遠くを見つめるようになっていきました。

大学卒業後は、全くの冒険心で受けたパリの CNSM の Cycle de Perfectionnement（通称 3ème cycle）に合格してしまい、その報告を受けたワッセルマン氏は、はじめ全く信じてくださらなかったとお聞きしました！

それ以後、正味6年半ほどフランスで勉強を続けましたが、あの京都でのアカデミーがなければ、私は今音楽に関わって生きていたかどうかともわかりません。それを思うとあれは運命だったと思わざるを得ませんし、企画に携わってくださった皆様に本当に感謝の気持ちしかありません。」

<奈良田朋子（武庫川女子大学音楽学部准教授）>

同じく第1回アカデミー受講生で、平成元年（1989）日本現代音楽ピアノコンクール優勝、平成5年（1993）青山音楽賞受賞の大谷正和氏はアカデミーの思い出を次のように書いている。なお、大谷氏は本人も書いているように4回連続してアカデミーを受講し、フランス留学帰国後も毎年申し込んでいた。

「私にとってのワッセルマンさんは何と言っても、立命館大学に赴任される前の関西日仏学館館長としてのワッセルマンさんです。

今から23年前の1990年の春、忘れもしない『第1回京都フランス音楽アカデミー』という記念すべき講習会が関西日仏学館において開催されました。

その会場となった当時の関西日仏学館は私にとってまさに京都における異空間でした。あの建物に一步足を踏み入ると、廊下の軋む音も館内に漂う空気も何もかも全てがまさにフランスそのものだったような気がします。そしてワッセルマンさんはアカデミー期間中、あの優しいまなざしで本当に嬉しそうにこのアカデミーを見守っておられたのがつい昨日のことのように思い出されます。私はこの第1回のアカデミーから第4回まで連続して参加させていただくことができ、その後フランスへの留学を果たすことができました。このアカデミーは私にとってまさに現在の音楽生活の原点といえるもので、ここで学んだ素晴らしいフランスの伝統と感性を、微力ながら少しでも次の世代に伝えるべく日々奮闘しているところです。

1990年に始まり、今もなお続いている『京都フランス音楽アカデミー』で“本物の芸術”を学んだたくさんの日本人が、きっと今全国各地で演奏や教育に幅広い活動を繰り広げていることと思います。そう考えるとワッセルマンさんの蒔いた種の大きさに私達は感謝してもし尽くせない、そんな気持ちがあらためてこみ上げてきます。」

<大谷正和（京都女子大学教授）>

3. 第2回 (1991年)

第1回の好評を受けてのワッセルマン氏の喜びの言葉を抜粋しよう。

「京都フランス音楽アカデミーも来春は2年目を迎えます。皆様の御厚意、御協力のもとにアカデミーは京都の春の素晴らしい雰囲気の中で、いわば一種の祭りになったのです。パリからの先生方はいずれも京都に深く魅了され、次回も喜んで教えに来たいとの意向を示して下さいます。」

第2回の冒頭挨拶は、駐日フランス大使ロイック・エヌキヌス氏と、第1回の3人だった。ピュイグ＝ロジェ女史のお祝いの曲目紹介を載せる。

「たいへん嬉しいことに、京都フランス音楽アカデミーが2年目を迎えました。沢山の友人達に再会して、若返ったような気がします。じつにありがたいことです——特に私のような年齢の人間にとっては！

今年では全世界がモーツァルトを讃えておりますので、幼い頃ヴェルサイユの宮廷で演奏したというこの神童の作品にフランスの音楽家達が非常な親しみを感じていることを証明するために、このコンサートはモーツァルト四重奏曲で始まります。

続いて私達はプロヴァンス地方に移り、ダリウス・ミヨーとともにルネ王の暖炉のそばに座って、フランスの管楽器の見事な均質性をじっくりと味わうことになります。

次に、19世紀から20世紀への架け橋に生きた作曲家エルネスト・ショーソンが、クリスチャンヌ・エダ＝ピエールの感動的な声を通じて、見捨てられた女の永遠に尽きない物語、詩人シャルル・クロの歌詞による『果てしない歌』を語りかけます。

それから、ガブリエル・フォーレがピアノ四重奏曲第2番を携えて厳かにプログラムに登場します。

そして最後はフランシス・プーランクの六重奏曲。ダイナミックにしてやさしく、しかもひとりでの湧きだしてきたという感じの、精神の躍動する雰囲気の中にプログラムが締め括られます。

それでは聴衆の皆さま、どうぞ素敵な宵を！」

<日付と会場>

4月5日(金) 京都府立府民ホール<アルティ>

4月8日(月) 東京文化会館小ホール

4月9日（火）浜松市民会館

4月11日（木）呉市文化ホール

4月12日（金）ザ・シンフォニーホール

<プログラム>

モーツァルト：ピアノ四重奏曲 第1番 ト短調 k.478

ミヨー：ルネ王の暖炉 op.205 - 管楽五重奏のための組曲 -

ショーソン：果てしない歌 op.37 - ソプラノとピアノと弦楽四重奏のための -

フォーレ：ピアノ四重奏曲 第2番 ト短調 op.45

プーランク：ピアノと管楽五重奏のための六重奏曲

<演奏者>

Th. パラスキヴェスコ（ピアノ）／J. プラット（ヴァイオリン）／B. パスキエ（ヴィオラ）
／A. ムニエ（チェロ）／Ch. エダ＝ピエール（ソプラノ）／P. ドウカン（ヴァイオリン）
／J-C. ペヌティエ（ピアノ）／R. ギヨー（フルート）／P. ピエルロ（オーボエ）
／M. アリニョン（クラリネット）／田中 雅仁（ファゴット）／J. バルボトゥ（ホルン）

4. 第3回（1992年）「コンセルヴァトワールの巨匠たち」

<メッセージ>

ロイック・エンキン，資生堂社長・福原義春，中江利忠，ミッシェル・ワッセルマン，アンリエット・ピュイグ＝ロジェ

「年寄りの特権（？）で再会できる懐かしく貴重な顔触れと才能をずらりと揃えたアンサンブルを再び迎えるのは、私にとってなんという喜びでしょう。ようこそ、クリスチャン、ピエール、ジョルジュ（勿論お判りでしょうが、今夜の3人のピアニストのことです）。嬉しいことに、3人も私の生徒でした。素晴らしい才能を駆使して、このまたとない、ぞくぞくするほどヴァラエティーに富んだ室内楽のプログラムを聴かせてくれるアンサンブルのメンバーの皆さん、ありがとう。」
（ピュイグ・ロジェ）

大阪・シンフォニーホールでの4月11日の会のあと、4月16日に中村孝義氏の批評が毎日新聞に掲載された。

「京都フランス音楽アカデミーの講師陣は、今年もまた心に残る室内楽の夕べを届けてくれた。彼らは室内楽を知り尽くしている。個々の奏者の内奥から湧きおこってくる楽興が自然に寄りそい美しい調和に至る独特の風情のあるもので透徹した理性と、繊細な音色感やバランス感覚の良さがそれを支えているのはいうまでもない」

そして、その例として、フォーレの「優しき歌」についてくわしく述べている。

<日付と会場>

- 4月3日（金）京都府立府民ホール<アルティ>
- 4月7日（火）浜松市民会館
- 4月8日（水）東京文化会館小ホール
- 4月10日（金）呉市文化ホール
- 4月11日（土）ザ・シンフォニーホール

<プログラム>

- ハイドン：ピアノ、フルートとチェロのための三重奏曲 ト長調 Hob.XV-32
- ブルッフ：ヴィオラ、クラリネットとピアノのための8つの小品 作品83より
- フォーレ：やさしき歌（ヴェルレーヌの詩によるソプラノ、ピアノ、弦楽四重奏とコントラバスのための歌曲集 作品61）
- サン＝サーンス：動物の謝肉祭（フルート、ピッコロ、クラリネット、2台のピアノ、セレスタと弦のための動物学的大幻想曲）

<演奏者>

- Ch. イヴァルディ（ピアノ）／J. プリュデルマッシュェール（ピアノ）／P. ドゥカン（ヴァイオリン）／G. ジャリ（ヴァイオリン）／B. パスキエ（ヴィオラ）／Ph. ミュレール（チェロ）／奥田一夫（コントラバス）／R. ギヨー（フルート）／J. デイドナト（クラリネット）／八田耕治（パーカッション）

5. 第4回（1993年）

<メッセージ>

- ロイック・エンキン、福原義春、中江利忠、ミッシェル・ワッセルマン

第4回はピュイグ＝ロジェ女史へのオマージュとなった。

「アンリエット・ピュイグ＝ロジェ先生が昨年11月24日にお亡くなりになりました。メシアンの初期の作品の数々を初演し、コンセルヴァトワールでナディア・ブーランジェの後継者となられた後、先生は日本で演奏家の他に教授としての輝かしい経歴を完了されたのです。京都フランス音楽アカデミーの名誉校長も務めて下さいました。

このコンサートを先生に捧げます。」

<日付と会場>

- 4月2日（金）京都府立府民ホール<アルティ>
- 4月6日（火）東京都文化会館小ホール
- 4月7日（水）浜松市民会館
- 4月9日（金）豊田市民文化会館小ホール
- 4月10日（土）ザ・シンフォニーホール

<プログラム>

- シューマン：クラリネットとヴァイオラとピアノのための「おとぎ話」作品132（全曲）
- デュパルク：悲しい歌／旅への誘い／嘆き
- ショーソン：蝶々／リラの花咲く頃
- フォーレ：ピアノ四重奏曲 第1番 ハ短調 作品15
- ピエルネ：室内ソナタ 作品48
- ショーソン：ピアノとヴァイオリンと弦楽四重奏のための協奏曲 ニ短調 作品21

<演奏者>

- J. デイドナト（クラリネット）／T. アダモプロス（ヴァイオラ）／P. ポンティエ（ピアノ）
- ／Ch. エダ＝ピエール（ソプラノ）／Ch. イヴァルディ（ピアノ）／R. ドガレイユ（ヴァイオリン）
- ／Ph. ミュレール（チェロ）／R. ギヨー（フルート）／G. プリュデルマッシュェール（ピアノ）
- ／G. ジャリ（ヴァイオリン）／森悠子（ヴァイオリン）／ジルベール・アミ（作曲）

6. 第5回（1994年）

この会のプログラムには、船山信子氏（上野学園大学教授）の「京都フランス音楽アカデミーの5年」が掲載され、私が初回の項で書いた発足のいきさつ、5年間の学生の応募状況などが

細かく記されている。

興味深いのは、パリ国立高等音楽院の10名もの教授が3週間も来日することへのパリ側の院長の態度で、簡単に賛意を示さない院長に「パリ国立高等音楽院の教育の根を、しっかり日本へも定着させる」という条件でドゥカン教授が院長のゴーサインを引き出した、という。

もうひとつ船山氏が指摘するのは、ピアノ（室内楽・歌曲伴奏）クラスへのクリスチャン・イヴァルディ教授の来日（第3回から）である。歌曲やソロ楽器の伴奏といった室内楽は、日本の教育メソッドの中で軽視される傾向があり、このアカデミーでも最初は希望者が少なかった。が、イヴァルディ氏の教育・演奏両面での強い魅力と実力で、希望者は倍増している。

また船山氏は、このアカデミーの教授陣が、学生達に言葉で示すだけでなく、すぐ自ら弾き、歌ってみせることを指摘している。全教授にそれだけの幅広い演奏能力があるということだろう。

各教授の語録が書かれていたので、ここに転載する。いずれも“真実”である。

「沢山のヴィブラートを試して響きの色彩を探してごらん。ブラームスの緩徐楽章はテンポではなく、音の色彩とポエジーが問題ですからね」（ブルーノ・パスキエ教授）

「ピアノを美しく弾きたいのなら、歌とオーケストラを学ばなければ！」「ショパンの音楽はリストとは違って、テクニックも必要ですがそれを見せてはいけない。それはあなただけの秘密にしておかないとね」（ジャン＝クロード・ペヌティエ教授）

「音楽はサッカーではないから、そんなに弾きまくらないで！音楽は精神の遊戯（ジュ）ですから」「（17歳の生徒に）もっと疲れて、年老いて、だけど勇敢に奏いて下さい」（アラン・ムニエ教授）

「フランス人は音楽には3つあるという。いい音楽、悪い音楽、そしてトマの音楽とね、ハハ…でもトマが問題外というのは不当です。トマのオペラはたしかに陳腐なところもあるけれど、『うた』の感覚は捨てがたいからもっと歌って発見して下さいな」（クリスチャンヌ・エダ・ピエール教授）

<メッセージ>

ジャン・バルナール・ウーブリュー駐日フランス大使

<日付と会場>

- 3月31日（木）京都府立府民ホール<アルティ>
- 4月5日（火）浜松市民会館
- 4月6日（水）東京文化会館・小ホール
- 4月8日（金）愛知県芸術劇場コンサートホール
- 4月9日（土）ザ・シンフォニーホール

<プログラム>

- モーツァルト：オーボエ四重奏曲 へ長調 K.370 (368b)
- アーン：灰色の歌（詩：P. ヴェルレーヌ）
- ラヴェル：ピアノ三重奏曲 イ短調
- バルトーク：コントラスト（ヴァイオリン、クラリネット、ピアノのための）
- フランク：ピアノ五重奏曲 へ短調

<演奏者>

- M. ブルグ（オーボエ）／R. ドガレイユ（ヴァイオリン）／B. パスキエ（ヴィオラ）／
- Ph. ミュレール（チェロ）／R. ヤカール（ソプラノ）／Ch. イヴァルディ（ピアノ）／
- G. プリュデルマッシュェール（ピアノ）／J. デイドナト（クラリネット）／P. ポンティエ（ピアノ）／
- R. パスキエ（ヴァイオリン）／森悠子（ヴァイオリン）

7. 第6回（1995年）

<メッセージ>

ジャン＝ベルナール・ウーブリュー駐日フランス大使

<6回目を迎える Academie >（Les Voix 1995 春号）

「京都フランス音楽アカデミー 音楽への愛と、花開く才能の祭典」

アカデミーの成立までの説明のあと、このアカデミーがフランスの二つの国立高等音楽員（パリ及びリヨン）で行われている教授法を導入していること、数少ない生徒を丁寧に導くこと、毎日午前中は教授陣が集まり、室内楽アンサンブル・コンサートの練習をすること、日本人にとって文化のふるさとである京都で特別な教育を受ける機会を提供すること、ドイツ音楽の影響の強い日本へ、フランスの演奏法とレパートリーを広げること目

的にしている。しかし、アカデミーはもっと広い意味で「音楽への共通の愛と花開く才能の祭典」である。筆者にとっても、運営している身辺の3,4人にとっても、このアカデミーがなにより「生きる」に素晴らしいものであることはお分かり頂けるであろう。

(ミシェル・ワッセルマン)

<日付と会場>

- 3月31日(金) 京都府立府民ホール<アルティ>
- 4月4日(火) アクトシティ浜松・中ホール
- 4月5日(水) 東京文化会館小ホール
- 4月6日(木) 愛知県芸術劇場コンサートホール
- 4月8日(土) いずみホール

<プログラム>

- シェーンベルク：室内交響曲 第1番 作品9
- ルーセル：ロンサールの2つの詩 作品26
- ドビュッシー：弦楽四重奏曲 ト短調
- ラヴェル：2台のピアノによる「ラ・ヴァルス」-舞踏詩
- アミ：ヴァイオリンとクラリネットとピアノのための三重奏曲
- ヨハン・シュトラウス：皇帝円舞曲

<演奏者>

- C. エダ=ピエール (ソプラノ) / P=L. エマール (ピアノ) / O. ガルドン (ピアノ)
- / H. セルメット (ピアノ) / G. ジャリ (ヴァイオリン) / R. パスキエ (ヴァイオリン)
- / 森悠子 (ヴァイオリン) / B. パスキエ (ヴィオラ) / Ph. ミュレール (チェロ) /
- Ph. ベルノルド (フルート) / J. デイドナト (クラリネット) / G. アミ (作曲) /
- M. ブルグ (オーボエ)

8. 第7回 (1996年)

<メッセージ>

ジャン=ベルナル・ウーブリュー駐日フランス大使

<日付と会場>

- 4月5日（金）京都コンサートホール・小ホール
- 4月8日（月）福岡銀行本店・大ホール
- 4月9日（火）アクトシティ浜松・中ホール
- 4月11日（木）東京文化会館・小ホール
- 4月13日（土）いずみホール

<プログラム>

- ブリテン：幻想曲 作品2
- フォーレ：ヴェルレーヌの5つの歌（ヴェネツィア） 作品58
- ドビュッシー：前奏曲集第1巻より 第10番「沈める寺」／ステファーン＝マラルメの3つの詩
- ストラヴィンスキー：兵士の物語（ヴァイオリン，クラリネット，ピアノ用組曲）
- ルーセル：フルート三重奏曲 作品40
- ミヨー：フルート，オーボエ，クラリネットとピアノのためのソナタ 作品47
- シューマン：ピアノ五重奏曲 変ホ長調 作品44

<演奏者>

- R. パスキエ（ヴァイオリン）／T. アダモプロス（ヴィオラ）／Ph. ミュレール（チェロ）
- ／R. ヤカール（ソプラノ）／C. イヴァルディ（ピアノ）／横川晴晃（クラリネット）
- ／H. セルメット（ピアノ）／Ph. ベルノルド（フルート）／R. ドガレイユ（ヴァイオリン）
- ／森悠子（ヴァイオリン）／G. プリュデルマッシュール（ピアノ）

9. 第8回（1997年）

<メッセージ>

ジャン＝ベルナル・ウープリュー駐日フランス大使

第8回終了後、1997年9月号の「音楽芸術」に船山信子氏（音楽学，上野学園大学教授）が「京都フランス音楽アカデミー」8年の足跡として、記録を載せている。

第5回のプログラムに掲載した内容が殆どなので、ここでは取りあげないが、第8回からアカデミー受講希望者が減少、メセナ支援の後退による暗雲がかかり始めていることが指摘されている。そして、この良心的なアカデミーの存続こそが、今後の日本の音楽教育のために必要

なものである、と説く。

もう一件、1997年12月号の「音楽の友」に載った第66回日本音楽コンクール本選会入賞・入選者一覧の中に本アカデミーの受講者（第3～8回）が7名含まれていることが判明した。

- ・ヴァイオリン部門：第1位・清水英理子，第2位・島田真千子
- ・オーボエ部門：第1位・吉井瑞穂，第3位・加納律子
- ・チェロ部門：第1位・上森祥平，入選・花岡伸子
- ・ピアノ部門：第3位・伊藤野笛

<日付と会場>

- 4月4日（金）京都コンサートホール・小ホール
- 4月9日（水）アクトシティ浜松・中ホール
- 4月11日（金）東京文化会館・小ホール
- 4月12日（土）いずみホール

<プログラム>

- モーリス・エマニュエル：フルート，クラリネット，ピアノのためのソナタ
- ピエルネ：ピアノ五重奏曲 作品41
- ドビュッシー：忘れられた小歌／海（カプレ編曲，2台のピアノのための）
- ラヴェル：弦楽四重奏曲 へ長調

<演奏者>

- Ph. ベルノルド（フルート）／J. デイドナト（クラリネット）／G. プリュデルマッシュェール（ピアノ）／G. ジャリ（ヴァイオリン）／Ph. ミュレール（チェロ）／O. ガルドン（ピアノ）／A. メロン（ソプラノ）／J-F. エッセール（ピアノ）／R. パスキエ（ヴァイオリン）／森悠子（ヴァイオリン）／B. パスキエ（ヴィオラ）

10. 第9回（1998年）

<メッセージ>

ジャン＝ベルナル・ウーブリュー駐日フランス大使

第9回のアカデミー受講後、「ザ・フルート」（1998年7、8月号）に、受講生から次のようなフィリップ・ベルノルド教授礼賛の一文が寄せられたので、中心部分を転載する。

「今回が来日4回目となるベルノルド教授は、1987年に第3回ランバルコンクールで優勝、リヨン・オペラ座管弦楽団首席奏者を経て、現在リヨン国立高等音楽院教授を務めている。『美しい音がすべての基本』と説きながら、『歌口は開けて吹く』『低音域より高音域の音量が大きくなるのがフルートという楽器の性質なのだから、それに逆らってはいけない』『 unnecessary ヴィブラートはかけない』『息の抑揚こそ音楽的表現のもと』などとレッスンでは指導した。古楽器の奏法にも通じ、フランスの作品はもちろん、現代作品でも初見に近い状態で吹ききる実力に、一同頭が下がった。」

<日付と会場>

- 4月3日（金）京都コンサートホール・小ホール
- 4月9日（木）アクトシティ浜松・中ホール
- 4月10日（金）カザルスホール
- 4月11日（土）いずみホール
- 4月20日（月）リヨン・オペラ歌劇場

<プログラム>

- モーツァルト：フルート四重奏曲 第1番 ニ長調 K.285
- シューベルト：幻想曲 ヘ短調 D.940 作品103
- コダーイ：セレナード ヘ長調 作品12
- ラヴェル：ヴァイオリンとチェロのためのソナタ
- ドビュッシー：3つの歌曲／喜びの島／華やかな饗宴 第1集
- プリス：オーボエ五重奏曲（オーボエと弦楽四重奏のための五重奏曲）

<演奏者>

- Ph. ベルノルド（フルート）／T. アダモプロス（ヴィオラ）／Ph. ミュレール（チェロ）
- ／C. イヴァルデイ（ピアノ）／G. プリュデルマッシュェール（ピアノ）／G. ジャリ（ヴァイオリン）
- ／R. パスキエ（ヴァイオリン）／A. M. ロッド（ソプラノ）／H. セルメット（ピアノ）
- ／M. プルグ（オーボエ）／森悠子（ヴァイオリン）

11. 第10回（1999年）

<メッセージ>

- モーリス・グルドー＝モンターニュ駐日フランス大使

<寄稿①> 「コンセルヴァトワールの巨匠たち - 第 10 回を迎えて -」

1992 年（第 3 回）に毎日新聞に音楽アカデミー演奏会の批評を書いた中村孝義氏（音楽学、大阪音楽大学教授）が、今回はプログラムに御祝を載せている。

「彼らの紡ぎ出すアンサンブルの質の高さ、取りあげられる作品の多彩さ」を絶賛し、今回珍しくプログラムに入っているヴィエルヌ：ピアノ五重奏曲作品 42 への期待を述べている。

<寄稿②> 「十年、通ってしまいました。」

東京芸術大学教授で、クラリネット奏者の村井祐児氏からのメッセージ。

教授陣の代表に、レジス・パスキエ氏を選び、「貴方のは真面目で悪くない。がもっとユーモアが含まれているのではないか、例えばこんな風に」「左手は良いが、右手の弓のほうがおろそかにならないように。もっと右手が弾く気になるべきだよ」「その指使いで君はよく出来るね。ボクはそんな超絶技巧はできないよ」等々、楽しくも厳しいレッスン風景を描いている。

<日付と会場>

4月2日（金）京都コンサートホール・小ホール

4月7日（水）紀尾井ホール

4月9日（金）アクトシティ浜松・中ホール

4月10日（土）いずみホール

<プログラム>

ベートーヴェン：セレナーデ ニ長調 作品 25

ベルク：室内協奏曲よりアダージョ

フォーレ：ピアノ三重奏曲 ニ短調 作品 120

デュパルク：戦いのある国へ／悲しい歌／前世／ミニョンのロマンス／旅への誘い

ヴィエルヌ：ピアノ五重奏曲 ハ短調 作品 42

<演奏者>

Ph. ベルノルド（フルート）／G. ジャリ（ヴァイオリン）／B. パスキエ（ヴィオラ）

／J. デイドナト（クラリネット）／R. パスキエ（ヴァイオリン）／Ph. ミュレル（チェロ）

／G. プリュデルマッシュェール（ピアノ）／A. メロン（ソプラノ）／Ch. イヴァルディ

（ピアノ）／森悠子（ヴァイオリン）／O. ガルドン（ピアノ）

12. 第11回（2000年）

<メッセージ+アカデミー卒業生パリ公演>

モーリス・グルドー＝モンターニュ駐日フランス大使

今回は、日本での公演数が昨年までに比べて一つ減ったが、その代わりに4月18日にアカデミーの出身者4人がシャトレ劇場（パリ市立音楽劇場）での「フランス音楽アカデミーアンサンブル」の幕開けを飾った。

<日付と会場>

3月31日（金）京都コンサートホール・小ホール

4月3日（月）いずみホール

4月6日（木）東京文化会館小ホール

4月18日（火）シャトレ劇場

<プログラム>

モーツァルト：アダージョとフーガ ハ短調 K.546

ベルリオーズ：オフェリアの死

リヒャルト・シュトラウス：オフェリアの歌

ルター：ピアノ四重奏曲の楽章

ジョリヴェ：リノスの歌

ラヴェル：スペイン狂詩曲

バルトーク：コントラスト

<演奏者>

G. ブーレ（ヴァイオリン）／T. アダモプロス（ヴィオラ）／Ph. ミュレール（チェロ）
／A. M. ロッド（ソプラノ）／D. メルレ（ピアノ）／Ph. ベルノルド（フルート）
森悠子（ヴァイオリン）／H. セルメット（ピアノ）／G. プリュデルマッシュェール
（ピアノ）／横川晴児（クラリネット）／R. パスキエ（ヴァイオリン）

13. 第12回 (2001年)

<メッセージ>

モーリス・グルドー＝モンターニュ駐日フランス大使

<日付と会場>

3月30日 (金) 京都コンサートホール・小ホール

4月3日 (火) いずみホール

4月5日 (木) カザルスホール

<プログラム>

ドヴォルザーク：2台のヴァイオリンとヴィオラのための三重奏曲 ハ長調 作品74

ウェーバー：フルート、チェロとピアノのための三重奏曲 ト短調 作品63

バルトーク：44の二重奏曲 (ヴァイオリン2) より

ブラームス：ヴィオラソナタ 第1番 ヘ短調 作品120-1

フォーレ：やさしき歌 (ヴェルレーヌの詩によるソプラノ, ピアノ, 弦楽四重奏とコントラバスのための歌曲集 作品61)

<演奏者>

A. メロン (ソプラノ) / Ch. イヴァルディ (ピアノ) / G. プリュデルマッシュェール (ピアノ) / O. ガルドン (ピアノ) / G. プーレ (ヴァイオリン) / R. パスキエ (ヴァイオリン) / Ph. ミュレール (チェロ) / 新真二 (コントラバス) / Ph. ベルノルド (フルート) / 森悠子 (ヴァイオリン) / B. パスキエ (ヴィオラ)

14. 第13回 (2002年)

<メッセージ>

モーリス・グルドー＝モンターニュ駐日フランス大使

<日付と会場>

4月2日 (火) 京都コンサートホール・小ホール

4月5日 (金) いずみホール

4月7日 (日) 東京文化会館・小ホール

<プログラム>

シューベルト：弦楽四重奏曲 第12番 ハ短調 D.703 「四重奏断章」

サン＝サーンス：見えない笛

カブレ：おいで、見えない笛のため息が…／聴け、わが心

マルタン：3つのクリスマスの歌

武満 徹：ヴォイス（フルート・ソロ）

ラヴェル：ラ・ヴァルス

ブリテン：幻想曲 作品2

フォーレ：ピアノ五重奏曲 第2番 ハ短調 作品115

<演奏者>

T. アダモプロス（ヴィオラ）／Ph. ミュレール（チェロ）／A. M. ロッド（ソプラノ）

／Ph. ベルノルド（フルート）／G. プリュデルマッシュェール（ピアノ）／H. セルメット

（ピアノ）／J. L. カベツァリ（オーボエ）／R. オレグ（ヴァイオリン）

／D. メルレ（ピアノ）／G. プーレ（ヴァイオリン）／森悠子（ヴァイオリン）

15. あとがき

1990年にヴァイオリニスト・森悠子氏とともにワッセルマン氏が創設した京都フランス音楽アカデミーは、2014年に第24回を迎えるが、今回の記録はワッセルマン氏が実行委員長・館長を務めていた1994年までと、専務理事を務めていた2002年までのものである。この10年余りの活動においてワッセルマン氏を支え続けた関西日仏学館の玉村奈緒子さん他のメンバーの協力も忘れてはならないであろう。

日本では「荒城の月」の作曲者・瀧廉太郎が生まれた年（1878年）に音楽取調掛が開設され、その掛長・伊沢修二などの努力により東京音楽学校（現東京藝術大学）が創立されている。この100年余りで日本の洋楽の世界は大きな進歩を遂げたが、フランス・イタリア・ドイツなどの持つ音楽の長い歴史とその深さには、多くの面で及ばない。国籍、時代を超えたところで心に響く音楽を感じ、学ぶ生徒にとって、このアカデミーは大きな拠所となったに違いない。

このアカデミーは収益性に重きをおいていない。また、フランスでもめったに演奏されない珍しい曲を何度もこのアカデミーコンサートのために選んでいる。（例・「室内楽のための優しき歌」（フォーレ作曲）、「ヴァイオリンとクラリネットとピアノのための三重奏曲」（アミ作曲）など。）

ワッセルマン氏は、このアカデミーの仕事のほかに、最近では京都オペラ協会の総監督とし

て「カプレーティ家とモンテッキ家」「シンデレラ」「セビアの理髪師」など、数々のオペラを長岡京記念文化会館で公演、満員の聴衆の拍手を浴びている。

この記録を終えるにあたり、京都におけるワッセルマン氏の多方面の活躍に接し、その恩恵を受けた者として、私からも感謝の気持ちを捧げたい。

またアカデミー初期から現在に至るまで受講、伴奏を続けている山口博明氏（京都教育大学准教授、園田高弘賞ピアノコンクール及び宝塚ベガ音楽コンクール第1位、日本音楽コンクールピアノ部門第2位）と夫人のチェリスト・山口真由美さん（日本アンサンブルコンクール第1位）のアカデミーへの思い出と感謝の言葉でこの文を締めくくりたいと思う。

「私共二人が京都フランス音楽アカデミーで、ピアノのクリスティアン・イヴァルディ先生に教えていただくようになってから長い年月が流れました。イヴァルディ先生の多彩な音色と自然な音の流れには人を強く惹きつける魅力があります。

また、チェロのフィリップ・ミュレル先生のお手本演奏は、非常に素晴らしい上に、自筆譜の研究など学術的な背景がその演奏の中に感じられます。お二方とも、年を重ねて衰えるどころか、ますます好奇心にあふれ、幅を広げていらっしゃいます。このような先生方をお招きして開催される京都フランス音楽アカデミーが今日まで続いているのも、最初に素晴らしいシステムを構築して下さったワッセルマン氏のおかげ、と心より感謝しております。」

（田隅 靖子，京都コンサートホール館長・京都市立芸術大学名誉教授）

L'Académie de musique française de Kyoto, depuis sa fondation en 1990 jusqu'à 2002

L'Académie de Musique française de Kyoto, qui connaîtra au printemps 2014 sa vingt-quatrième édition, est une manifestation annuelle de l'Institut Français du Japon - Kansai. Elle fut créée par Michel Wasserman, alors directeur de l'Institut, à l'instigation de la violoniste Yuko Mori, qui souhaitait faire valoir l'esprit et les méthodes de l'École française d'interprétation en invitant une dizaine de maîtres des Conservatoires Nationaux Supérieurs de Musique de Paris et de Lyon dans les principales disciplines (chant, piano, cordes et instruments à vent). Yuko Mori avait eu ces maîtres pour partenaires au cours du séjour professionnel d'une vingtaine d'années qu'elle avait effectué en France.

L'Académie, stage d'interprétation de douze jours destiné à des élèves retenus à l'issue d'un processus de sélection sévère, était suivie d'une tournée de concert des professeurs dans les principales villes du Japon : ces grands maîtres du répertoire français préparaient en marge du stage un programme original de musique de chambre à géométrie variable qui faisait une large part à la musique française, incluant des oeuvres parfois rarement jouées en France même.

Le présent article, qui se limite à la période où Michel Wasserman prit une part prépondérante à la programmation de l'événement en tant que Président du Comité d'organisation (1990-1994) et Directeur exécutif (1995-2002), donne la parole à des enseignants et interprètes japonais qui participèrent à la manifestation en tant qu'élèves et/ou accompagnateurs, et rappelle avec émotion et gratitude la grande figure de Henriette Puig-Roget (1910-1992), directrice honoraire des trois premières éditions, qui fut au Conservatoire National Supérieur de Musique de Paris le professeur admiré de plusieurs des maîtres de l'Académie.

(TASUMI, Yasuko, Directrice du *Kyoto Concert Hall* et
Professeur honoraire à l'Université Municipale des Arts de Kyoto)

